IOP・EC連続公開講座「東洋の英知と現代社会」（第一回）

変わりゆく宗教の機能

世俗社会における寛容と結合

ブライアン・ウィルソン
木村勝彦 訳

宗教をその本質において人格的かつ個人的な関心事とみなすことが、少なくとも近年の西洋諸国ではあたりまえとなっております。宗教がより大きな社会のために機能していたという考え方は、もはや流行遅れなのです。しかしながら、さまざまな伝統的宗教が世俗の権威と相互に支え合いながら機能していたことは、容易にみてとれます。

ヨーロッパにおけるキリスト教の歴史、中東におけるイスラム教の歴史、そして東洋各地における仏教の歴史的な諸相といった例をみれば、大宗教が皆それぞれの背後にある社会体制と緊密に絡まり合っていたことは明らかです。伝統的な社会は自らを思想的に正当化する上で、有力な宗教体系に依存しました。そして宗教それ自身は、理想化された形での社会の高度な表現だったのです。

歴史にみる宗教の機能

かつて宗教は、社会の秩序と安寧を維持させるという明確な機能をもっておりました。何よりもまず、宗教は社会的結合（cohesion）を強化するものでした。自らの宗教的同一性や超自然的起源に関する意識、あるいはより高い力――そうした力は神の意志とみなされたり、普遍的な法則のはたらきとみなされたりしたものですが――のはたらきに与っているのだという意識が共通のものとなることによって、社会はかなり支えられていました。宗教的教説の実際の内容は、こうした特殊な機能、つまり共通の信条や儀式を通じて伝えられる統一感とか、より高い目標や究極的目的に関わる共同体への帰属感といったかたちをとるものではありませんでした。しかし宗教的統一は社会的統一を象徴し、確実なものとしていたのです。

宗教の第二の機能は社会秩序を正当化することでした。支配者がふりかざした権威はむき出しの権力以上のものです。権力の行使を擁護するために、支配者たちは宗教的合法化に訴えかけたのです。彼らは神に責任を負っていると主張したり、業（karma）に言及することによって責任を主張したりしました。更に特殊なものとして、ある宗教体系においては、支配者たちは世襲原理を掲げることにより、そうした責任の主張をカースト制度や神意というようなものにまで尖鋭化させました。

しかし本質的に同じなのは、権威が超越的な力や原理を引き合いに出すことで裏打ちされているということです。社会的責任や権力は、この世ならぬ存在者や法則に訴えかけることによって是認され、実のところ聖化されたのであります。支配者たちがその権威を今述べたような源泉を引き合いに出すことによって正当化し得たのだとすれば、これもまた宗教が社会的結合を維持させる方途の一つであったということになりましょう。

さて社会的統制の強化が、宗教の第三の機能でした。あらゆる社会は必ず市民に対して一定の統制を行使するものです。先進社会では、その最も顕著な機関は刑法や民法の体系であり、警察の治安活動でありましょう。しかしながら、そうしたあからさまな統制機関に頼るだけでは、いかなる社会もさほど長続きはしないものです。いかなるところにも、文化的な秩序の枠組みとの一致がなければならないのです。社会的統制はいつも自己統制の営みによって（何らかのかたちで）バランスを保たれます。

統制された反応を引き出すための高度にテクノロジー化された近代的な手段をもってしても、善良であることを市民にひたすら強制するだけのシステムがはっきりと作動しない以上、あるいはそう長く作動しない以上、市民は善良であるように説き勧められ、善良であろうと欲するように導かれなければなりません。しかし、人々はいかにして、善良であろうと欲するように導かれるのでしょうか？　かつては、そうした統制の源泉はおおかた宗教にあったのです。宗教は超自然的な制裁にしばしば言及することによって説得するという独自の手段をもっていました。

キリスト教では、地獄の恐怖や天国の約束が、人々に正しく振る舞うよう説得する手立てとしては最も有力なものでした。仏教では来世の善業、悪業の積み重ねに関して、はるか先まで見通しが立てられていました。これらは、宗教的に社会を統制する道具としては生硬なものでした。しかし、もちろん、慈しみ深い心情を育み、徳を賞賛するとか、誠意、服従、奉仕、同胞愛、憐れみといった気質によって精神的文化を創造するというような、より洗練された積極的な方策もあったのです。和解や慰め、情操の教育などはすべて、このように社会全体が御し易い反応を示すようにし向けるという同じ努力の諸側面でした。

宗教は過去数世紀にわたって、他にも重要な機能を果たしました。つまり、宗教はしばしば、時の為政者が遂行する特殊な政策を是認するように求められたのです。戦争が宗教の名において始められたこともありますし、それほど劇的なものでなくとも、さまざまな行為が霊的な目的の名において採用されました。また、人生の目標や存在の意味に関する人々の問いに答えるという宗教の役割も、それに劣らず重要なものでありました。創造神話がその一例です。

東アフリカのある部族の宗教では、人間の起源は象と蟻とが夫婦になることに求められています。またキリス

ト教の聖書物語では、人間アダムは土の塵より創造され、その伴侶たるイブはアダムのあばら骨から造られたとされています。そうした物語は人間の起源を説明しようとする素朴な努力ですが、このように諸々のものはいかにして、今あるようなものになったかを語ろうとすることで知的な機能を果たしているのです。

宗教はまた、社会から不確定な要素を取り除き、特別なリズムや決まりを打ち立てるという機能も果たしました。そうしてこのリズムや決まり自体が改めて、秩序と予見の保証となったのです。宗教はあてにならない自然を確実なるものに作り変え、一定の秩序を建設しました。この秩序の中に人々は安心を見い出し、世界はいかに運行しているかという、より一般的な命題（理論としてよりはむしろ金言の形に要約できるような命題）に個人的な体験を結び付けることができるのです。理論は付け足しに過ぎませんでした！　またある種の機能は、社会的な現れにおいてよりも、むしろ個々の現れにおいて一層明確になりました。

このようにして宗教は悪を説明し、その及ぶところを少なくしたのです。キリスト教においては、悪そのものはこの世の力たる悪魔に帰せられ、もっと軽微な諸々の悪は数多くの小悪魔たちによるものとされました。さもなければ、悪は時として神の意志に結び付けられることもありました。曰く、神のはたらきは神秘的であり、「われらを試みるため」の悪として人間に苦しい体験を課し給うのだ、と。仏教では、悪は業というものに、つまり前世での悪行によって生み出された結果の積み重ねに帰せられました。しかし、理由付けがいかに特殊なものであれ、何らかの永続的な真理に結び付けることによって出来事を説明することを許容する図式のようなものが、ここにはあるのです。そうした拠り処をもつことによって得られる満足は個人的なものであっても、その祈りもまた、自らの宿命もしくは少なくとも苦しい体験を人々に甘受させるという社会的必要を満たすものでありました。人生や栄枯盛衰というものを同じように解釈することによって、一人一人が共通の希望や恐れに結び付けられ、また感情とそれを惹起する生活状況への対処の仕方についての共通の信念に結び付けられるのです。

こうしたさまざまなあり方において、宗教は社会のはたらきを支えたのです。究極的な実在、人生の目標、目的、人間が則るべき行動規範といったものについて、宗教は高次の一致を確立しました。社会的同一性の意識的表現である国家は、その草創期において宗教を必要としました。つまり人々がその宗教に十分に取り込まれ、国家の命令や禁制に従うことを必要としたのです。

こうして、キリスト教化した西洋の歴史の内に明瞭にみてとれるような状況が現出することになります。つまりそこでは、特定の認められた宗教的実践、できるならば宗教的信念を人々に押し付けることに、政治が積極的に加担したのです。宗教裁判はそうした宗教的一致をもたらすために用いられた手段の中でも最も激しいものでした。

しかし宗教裁判の時代が去った後もずっと、ヨーロッパ社会は宗教的義務を果たさない人々を虐げ続けたのです。かつての世界秩序は、宗教的な義務感を保つことに依存していました。キリスト教化された西洋社会の中ではさほど狭量でもないイギリスにおいてさえ、十七世紀にはさまざまなことが画策され、非国教徒は罰せられないまでも、厳格に活動を制限され、社会的に向上していく機会を奪われたのです。歴史上長い間、それもただキリスト教化されたヨーロッパにおいてばかりではなく、宗教は国家が人々を統制するための重要な機関とみなされました。とはいえ、宗教が社会的結合を支えることで国家も円滑に機能するという点では、キリスト教は極めて有効な保証でした。

このように市民社会が宗教的イデオロギーの一致に依存するという事態は、宗教を強力な社会的存在にしました。つまり宗教は他のすべての社会的活動をしっかりと統括し、社会の経済的なリズムさえも決定したのです。たとえば、種蒔きや収穫の時期、そうした作業が進められる手筈を決定することなどがそうでした。宗教はまた、ギルドを通じてマニュファクチュアを統制したり、条件を設けて職人たちを互いに競い合わせたりしました。更に、商人たちが商品を買い占めたり、廉価に仕入れて高価に売り付けようとするのを咎めて、商業にも諸々の規則を課しました。キリスト教のみならずイスラム教にお

いても、宗教的権威は利息をとるなどして暴利を貪る所業を厳しく糾弾し、倉庫業、金融業、周旋業などのいわゆる非生産的な活動をすべて槍玉に挙げたものです。とはいえ、宗教の経済的な役割についてはこれくらいにしておきましょう。宗教はまた、聖戦の遂行に関する教えから論戦や試練における問答の規定に至るまで、人間の争い事をも少なからず統制しようとしました。

地獄の劫罰か天国の平安かという死後の脅威に関する教義は、必ずしも人を悪から立ち返らせて善行をなすように仕向け得るというものでもありませんでしたから、宗教は罪の規定を明確にし、道徳論を刑法に仕立て上げました。

歴史的にみると、宗教は政治と密接に関わっており、宗教的エリートたちは、これら二つの制度領域の相互依存性を反映して、政治的エリートたちと緊密な関係をもっていました。彼らは相互に助け合って活動しましたが、国事に関する共通の関心によるのみならず、血縁関係によって結び付くことも少なくはありませんでした。政治の領域はその正当性を宗教的是認に負っており、政治的制度には宗教的関心が浸透していたのです。十六世紀のウルジー（T. Wolsey, 1475～1530）や十七世紀のリシュリュー（Duc de Richelieu, 1585～1642）のように、指導的な政治家がしばしば宗教的指導者であったというばかりではありません。ヨーロッパの政党の内には、たとえ名目上だけにせよ、いまだにその名に「キリスト教」の文字を冠しているものがあるのです。

政治の状況は、教育、福祉、レクリエーション、家庭といった他の社会的な営みにも反映されました。宗教はごく最近まで教育に対する独占的支配を要求していたのでありまして、十九世紀末になってもなおイギリスには公立学校よりも教会学校の方が多かったということや、ヨーロッパ中で聖職者が大学を支配していたことを思い起こしてみてください。初期の学問はなるほど聖職者によって促進されたのですが、教会によって厳密に統制されてもいたのです。

知識は宗教の領分であり、ガリレオからダーウィンに至るまで世俗の学者たちは厳しい束縛を意識していました。宗教はまた伝統的に治療活動にも関わっていました。

ヨーロッパ中の病院に看護の聖職者たちがいたことを考えてみればよいでしょう。更に教会はいろいろな見世物によって公認の一定の認められたレクリエーションを与えるかわりに、芝居から世俗的な芸術表現に至るさまざまな非公認の娯楽を抑圧しました。最後に、今日においてもなお、性的な規範や夫婦生活のルール、結婚や離婚の条件を指示することによって宗教団体が家庭生活を統制しようとしていることは、知らぬ人とてありますまい。

世俗化のプロセス

こうして宗教はひとたび社会生活のあらゆる部門を支配するに及ぶや、ひたすらに人格的かつ個人的な関心事であることからは大きく隔たってしまいました。しかし、宗教がかつてこのように公的な事柄に対してふるっていた優越性を喪失するという事態が、さまざまなペースで生じてきました。あらゆる領域で、宗教は社会体制の内部における公的な力としての影響力を減退させていったのです。かつて国家に対して宗教が行使していた機能は、他の機関に取って代わられることになりました。こうしてもはや、政治的権威は超自然的な正当化を必要としなくなります。民の声が神の声に取って代わったのです。先進国では、政府は有権者の声に照らして正当性を主張するのであって、自らが神的に定められ聖別されているからという訳ではありません。

社会統制はもはや、何かあの世における劫罰の脅威、報いの約束というようなものに依拠しないのです。われわれは適所に、刑法、警察、法的手続きの精巧かつ複雑な構造など、より入念な正当化の体系をもっています。信用格付から交通信号に至るまで、われわれの問題や動きを整理、調整する技術的な装置があるのです。われわれは人格的な道徳の問題ででもなければ（それとても次第にそうではなくなりつつあるのですが）、宗教的な掟や禁制にほとんど頼ることがありません。

繰り返しますと、われわれの社会はもはや、神の意志に拠るものだと主張することで政策決定を是認させようなどとはしません。国際連合の意志は、たとえまだ不確かなものではあれ、もっとたやすく発動されるのです。そして、国内および地方の問題に関しては、政府が人々

からの要求を取り上げて声明を出し、大衆の意志と言われ得るような政策を採用するのです。もちろん時として、主張は不首尾に終わることがあります。たとえば人頭税は確かに大衆の同意を取り付けることに失敗しました。しかし人頭税に対して本当に必要なのは神の裁きだなどとは、誰も思いもよらないでしょう。

更にまた宗教は、人の問いに知的な回答を与えるという点でも成功しませんでした。世界がいかに運行しているかということ、そしてまた人間はいかにして自然の力を己が意志に屈服させるようになったかということを知るために、われわれは次第に自然科学――今や社会の中で完全に自立しており、教団による統制の圏外にあるのですが――の方に目を向けるようになってきたのです。

宗教が社会体制の表舞台から脇役の方に追いやられてきたこのプロセスこそ、社会科学者のいう世俗化(secularization)のプロセスにほかなりません。この用語は、社会的プロセスに関する純粋に記述的な性格付けとして意図されています。つまり、宗教的な価値や前提に対立するものとして、世俗を主張するということを含意してはいないのです。

世俗化は、世俗の手続きを支持して宗教を槍玉に挙げるイデオロギーとしての世俗主義(secularism)とは異なります。それとは対照的に世俗化とは、宗教が社会体制の運営の中で重要性を喪失していったプロセスという周知の現象に対する、中立的な用語なのです。宗教自体が死に瀕しているとか、宗教的な人々の数が減少しているというようなことを(それが当たっているかどうかはともかくとして)、含意してはおりません。しかしながらこの用語は、これまで述べてきたこと、つまり宗教が文化的、社会的な事柄に対処する上でかつてないほど、小さな役割しか演じなくなってきている、そのさまざまな道筋を要約しているのです。

このプロセスのもう一つ別の見方としては、宗教がかつて国家に対して果たしていた奉仕から自由になったと言うこともできます。自由とは、つまりここでは、政治的、経済的、法律的な煩わしさに束縛されることなく、「己がことをなす」ということだと言ってよいでしょう。同様に、国家はもはや宗教的な関与を強要したり、時に

勧誘したりする必要を見い出さないのです。なぜならば、自分にとって都合の良い行動を市民から導き出すのに、別の手立てを国家は見い出したからです。こうしたプロセスは、さまざまな社会でそれぞれ異なったペースで生じてきました。

しかしながら、広く拡散し多様な情報システムを伴う世界では、イデオロギー的な手段で統制を行使することはできないのだということを、統治者たちは徐々に理解してきたのです。

十八世紀末以来――改革や革命により、また戦争に敗北することで、あるいはまた合理的前提に則って建設された新たな社会(アメリカ合衆国がその代表ですが)の出現によって――宗教は近代社会が内的統一を築くための基盤たり得ないということがはっきりしてきました。この結論は、特にアメリカ合衆国の出現によって自覚的にもたらされました。あの国自体、文化、言語、宗教がさまざまに異なる移住者によって構成されたものです。実際、そうした移住者の多くはさまざまな圧政からの宗教的亡命者だったのでありまして、時あたかも、特にヨーロッパにおいては、国家が為政者によって是認された特定の宗教だけを奉ずるよう市民に強制していたのでした。アメリカ合衆国は最初から多元的だったのでして、一、二の特定の州は一八三三年に至るまで特定の宗派を定めていたものの、連邦全体の国教などというものはありませんでした。そして宗教の側でも多数派になろうなどとはしませんでしたし、特定の特権的な教会という考え方自体が実のところ、あの新たな社会が創造される上でのそもそもの前提と相い容れなかったのです。

要するに、長い間ヨーロッパでは宗教的な一致が社会的統一の基盤であるとみられていたのに対し、アメリカ合衆国ではまったく反対の前提がなされなければならなかったのです。つまりそこでは、宗教的な寛容(toleration)が社会的統合の基盤であったのです。ヨーロッパでは、寛容は社会の結合にとって脅威であると思われていたのに対して、アメリカでは寛容こそがまさに国の連帯が築き上げられるべき基盤でした。社会の価値とはもはや、特定の宗教のイデオロギーの内側でのみ信奉されるような価値であってはならないのです。

一、二の教会が独占的に国家の支持を受けていることの多いヨーロッパの国々では、その他の宗教はすべて必然的に非国教徒とみなされました。そして非国教徒は、宗教的な服従ということも含めて、為政者の要求に従わないというきらいがありました。宗教的な不統一は政治的な反対、それどころか反乱の可能性さえはらんでいたのです。

宗教が国家統一の表現であり、社会をとりまとめる上で本質的なものだとみなされるところでは、寛容とは推進されることの最も遅い政策でした。国教にあらざる宗教は、既に浸透している国家的な統一感に挑戦するかのような二者択一的な価値を内包していたのです。

ヨーロッパの諸権力は宗教改革の後でさえ、徹底して宗教的統一性を維持し、それを押し付けようとしました。十六世紀フランスの絶対主義体制、オーストリア帝国のプロテスタント追放、十九世紀のドイツにおける文化闘争（Kulturkampf）、ポルトガルやスペインにおいて異端審問の時代から二十世紀に至るまで続いた宗教的少数者への弾圧、そしてイギリスでは、十九世紀に至るまでカトリックに対して苛酷で、イエズス会やユニテリアンの人々の生命を脅威にさらしさえしたさまざまな法律、――こうしたものはすべて、宗教的統一性に対する広範で絶えることのない関心の証拠となるものです。

しかしこうした強制も、長い目でみれば有効ではあり得ませんでした。寛容と個人の宗教的自由とが初めて保証されたプロテスタントの国々を皮切りに、キリスト教は無数のデノミネーションやセクトに分裂しました。そして今日では、かつてカトリックが一枚岩であった国々においても同様に、多くのセクトが盛んになっているのであります。ペンテコステ派は、一九五〇年以降さまざまな国でさまざまな時期に、彼らへの寛容さが増すにつれて急速に広まりました。

ヨーロッパにおける彼らの成功は、ラテンアメリカ諸国におけるその注目すべき成長と符合していただけではないのです。同じようなことはエホバの証人やモルモン教についても言えるのですが、他にも多くのものに対して途は開かれてきました。つまり、インド、朝鮮、インドネシア、日本など遠い世界から広まって来つつある運

動や、主にアメリカに起源をもつ多くの擬似宗教団体についても同じことがあてはまるのです。

こうした組織は、信仰や崇拝の幅広いスペクトルをなしています。その幾つかは現世拒否的集団として社会学者に知られているものです。それらはしばしば隔離された共同体の内に新たな生き方を求めるのですが、そこでは社会との接触が最小限に抑えられています。他に現世肯定的運動と呼ばれるものは、それとはまったく異なったあり方をしており、社会の内で生きてゆくための、そして利益や自己開発を実現するための、より実践的かつ効果的な規範を信奉者に与えるのだと主張しています。

世界は今や極めて変化に富んだ宗教的多様性の舞台となっており、そこにはこうした信仰のすべてが併存しているのです。それらは既成の教団に与えられていた特権のすべてを得ることはできないにしても、かなり大きな自由を享受しています。しかしながら、寛容が今やそれほど広くいきわたり、無差別なものになっているとしたら、宗教がかつて果たし続けてきた機能、つまり社会的結合を維持するということはいったいどうなってしまったのでしょうか？

その問題に対する安直な回答は、普遍主義的な信条をもつエキュメニストたちには好まれるでしょう。彼らは、あらゆる宗教はいずれ何らかの形で一つになる定めにあると信じているのです。まったく異なる集団が絶えず増え続けていることに対して際限なく寛容であるという現状は、あらゆる宗教が根柢において同じものだということの証拠となると、彼らは主張することでしょう。キリスト教徒たちは「結局われわれは皆同じ神を崇拝しているのだ」と言ったりするのですが、そうした言い方がまったく仏教徒を念頭に置いていないことや、キリスト教の三位一体の神がイスラム教の断固拒否する神人（man-god）やユダヤ教の認めない特別な主張を含んでいるということを、忘れ去っているのです。

先進社会（恐らくはどこでもそうなのですが）ではたらいている多くの信仰の間に相違があることは、実際誰の目にも明らかです。あるものは禁欲的で、他のあるものは緩やかでしょう。またあるものは来世での救済を強調し、他のあるものはただ現世にのみ関心をもっているで

しょう。たとえさまざまな信仰が何の軋轢もなく（あるいはさほどの軋轢もなく）共存しているとしても、それはそうした信仰のすべてが同じものだからというのではなく、世俗社会が維持している社会秩序の基本的に中立で、宗教的に無色な枠組みにそれらが依存しているからではないかということを決定的に見落としているところに、エキュメニストたちの楽観的な見込みは成り立っているのです。

さまざまな信仰は互いに異なるものであり、その多くは独自性を保ち続けます。そしてこうした独自性は、自分に取って代わろうとする異質な信仰や実践に、それほど簡単には適応しないものなのです。これはキリスト教やユダヤ教において顕著なことですが、リベラルな正統主義の主張の多くはまことに霊感の乏しいものになってしまったきらいがありますし、特にキリスト教の厳格なまでに排他的な傾向は幾分希薄になったと言えましょう。

しかしながら、このこと自体は他の宗教に対する適応というよりも、むしろこうした信仰すべてが今やその中ではたらかざるを得ない世俗の文脈に対する適応であるに過ぎません。また、いわゆるリベラルなキリスト教やユダヤ教が軟弱である一方で、これら両教やイスラム教においてファンダメンタリズム（根本主義）の呼び声がますます強くなってきておりますが、それは正統主義の主流が脆弱であるがゆえになお一層声高なものとなっているということも忘れてはならないでしょう。そして多くの場合、成長すべき潜在的な力を際立ってみせているのは、こうしたファンダメンタリストたちなのです。

このような兆候をまのあたりにするとき、安易なエキュメニズムに対する回答が、イギリス国教会の主教とローマ・カトリックの司教との偶然の邂逅をめぐる次のような物語に託されているのを、われわれは理解することができるでしょう。

彼らは共にある行事に出席していたのですが、その後でイギリス国教会の主教に差し向けられるはずの車が故障してしまったために、カトリックの司教が親切にも自分の車に同乗させるという事態が出来したのです。彼らは親密に語り合い、目的地で降りる際にはイギリス国教会の主教はカトリック側の寛大さに謝意を表し、その親切さを温かく賞賛しました。「結局」、彼はこう言ったのでした。「われわれは皆同じ神を崇拝しているのだということですな」。「そうですとも」、とカトリックの司教は答えました。「あなたはあなたの仕方で、わたしは神の仕方でね」。エキュメニストの熱狂はしばしば、いまだ明らかにもされず吟味もされていないような前提を秘めているものなのです！

現代社会と宗教

社会的結合に関する問いへのもう少しましな回答は、過去の社会について妥当したような仕方では、現代社会が実はもはや結合され得ないのだという認識の内にあります。君主たちが彼らの言う「真の宗教」を認めたのは、社会の安定性や秩序を維持するのに不可欠な保証をそこに見い出したからに過ぎませんでした。宗教はただ、同じイデオロギーや共通の価値によって社会の同一性を強化し、人々を結び付けるのに不可欠な手段に過ぎなかったのです。

宗教とは共通の意識や精神性を生み出すものであって、人々が従順になったり、同じ真実を受け入れたりすることを保証するのはまさにそうした意識だと考えられていました。そのような伝統的社会をとりまとめていくためには、共通の考え方が恐らく欠くべからざるものであったでしょう。

イデオロギーによるこのような方向付けは、人間の社会的環境に適合していました。伝統的社会における人々の生活は、限られた技術や方策によって支配されていたのです。彼らの生活体験や見通しは基本的には同じものでした。コミュニケーションも未発達でした。情報は乏しく、しかもゆっくりと伝えられていたのです。そして社会的体験は、更に地方性によって限定されていました。関係は地方的かつ個人的なものでありましたが、当時はまだ人間が産業化のプロセスに伴って生じた無数の部分的、断片的役割に振り分けられていなかったという意味では、その関係はまたしばしば全体的なものでもありました。

古典的な社会学者たちはこうした状況の結果を、「社

会的連帯」「集合的意志」「価値一致」というような用語で記述しました。人々が同じように考え、同じ信仰をもち、同じ儀礼を執り行い、同じ規範に従い、同じ究極的な目的のために奮闘し、しかもこうしたことすべてに関して同じ超自然的な正当化を受け入れ、そのゆえに社会はまとめられていたのです。

しかしながら、社会は進歩するにつれて、技術的にますます複雑な構造になっていきました。社会の構成員はかつてないほど多様な生活を送るようになったのです。人々の日常体験やライフスタイルはさまざまに異なり、その結果必然的にものの見方もまちまちになりました。つまり人々は異なった価値観も受け入れており、自動的な連帯感や共通意識などというものをもはや共有してはいないのです。

生産、分配、コミュニケーションのテクノロジカルな発展に伴う社会のこうした多様化のプロセスの中でも際立っているのは、特に労働作業の領域で人々が諸々の役割に振り分けられ、社会の進歩がその度合いに依存しているということです。そうした役割は全体的な人格を矮小なものに改造し、一定の技量や能力だけを動員します。そして人々を非人格的な地盤におくことで、他者との関係、それもほとんどすべての他者との関係を整理し直してしまうのです。役割を演じる者はこうしてその役柄の内で、全体的な人格であることをやめてしまいます。彼は演者となるのですが、時にはほとんど機械の一部品、自分が縛り付けられている大きな組織の一部になり下がってしまいます。そして彼の台本は十分に用意されているのです。こうしたことと無関係な人格性の一面を発揮する余地は厳密に制限され、生活の他の領域、主としてレジャーの時間に追いやられてしまいます。社会がますます組織化され、設備や資源が可能な限り合理的に動員、利用されるようになるにつれて、こうした役割を演じきることが規範となり、多種多様で特殊な役割が増えていくのです。

このように社会を役割の体系として絶えず再構成していこうとするプロセスに影響を受けて、かつては究極的な価値に与っていたものがだんだんと特殊な労働や手間についてのこまごまとした規範になっていくのを、われ

われはみることができるでありましょう。こうした社会体制の内には意識を共有する機会はほとんどありません。われわれは何か特殊なものとなり、各々がただわずかな者とのみ、つまり役割を演じる上での仲間とのみ特定の体験を共有するようになるのです。こうして労働という人生の主要な問題に関する限り、われわれは直接的な価値一致や共通の精神性に与るということを期待できないのであります。極めて多様な生活の環境、スタイル、レジャー、関心、信念、傾向に応じて、体験もさまざまに異なってきております。

こうした構造的分化の結果として何よりもまず、現代社会には社会的結合が欠けています。今日、宗教的な多元論が徐々に目立ってきているということが、この事実を裏付けているでありましょう。とは言え、現代社会にもまだ曲がりなりにもまとまりはあるのです。確かに階級、人種、世代、そして宗教などには深い溝があります。政治的対立や偶発的な暴動があるかと思えば、乱痴気騒ぎ、喧嘩、アルコール中毒、麻薬中毒は日常茶飯事ですし、はずみの暴力もあれば組織的犯罪もあります。富や繁栄に対する態度は人によって根本的に異なるでしょうし、ポルノグラフィー、妊娠中絶、安楽死、刑罰特に死刑などの問題をめぐっては深刻な意見の相違があります。しかし、社会的結合が欠如していることをそのように幾ら論ってみたところで、結局のところ現代社会にもなおまだまとまりはあるのです。それはいかにしてでしょうか？

そうしたまとまりはかつては結合的な価値に依存していたのですが、今日では合理的な技術に依存しているのです。つまり、現代社会は結合を欠いてはいても、統合（integration）されてはいるのです。われわれの社会体制は共有される価値の所産でもなければ、共通の集合意識によって維持されている訳でもありません。それは今日の複雑化したテクノロジカルな可能性の結果にほかならないのです。われわれは――お互いに関係をもちつつ――まとめられています。しかしそれは、同胞意識、相互の共感、共通の文化、国民としての同一性、愛国心、一つの宗教への帰依などによるものではなく、非人格的な関係の構造の中にわれわれが否応なく巻き込まれてい

ることによるのです。

役割を演じるというまさにそのことが、自分の活動が他の演者たちの活動と緊密に整合されるという事態を必要とするのであります。高度に計算し尽くされ練り上げられた結果を積み重ねていく共同作業のシステムを維持するために、われわれは非人格的で特殊な能力を取り交わしています。われわれはシステムの建設者ではあるのですが、演者としての人間存在は高度に合理化された機械の一部となっています。そしてわれわれの協調的な努力こそこの機械の動力なのです。このようにしてわれわれは官僚機構を作り上げるのですが、それはあたかも工場や実験室、エレクトリック製品のプラント工場がわれわれの技術的能力の所産であるようなものです。われわれは財政的な相互依存、納税義務、相互債務、保険、抵当、信用格付、分割払いなどに関する精巧なシステムを作り出しました。選挙、公職、軍役、陪審義務、教育の施設、保障など、さほど拘束的でない政治のシステムや市民としての義務についても言うまでもありません。

しかしこれ以上列挙するのはやめておきましょう。こうした装置の結果、われわれが皆、非人格的な相互依存の中に取り込まれているのは、誰にとっても身近で明白なことでしょう。そしてわれわれはそこから逃れ得ないのです。もしどこかに移住したとしても、同じようなシステムがわれわれの行く手に待ち構えているに違いありません。そしてそこには、今までなかったような、よく分からない面倒事が多々あることでしょう。このような社会的結束の非人格的な網の目から抜け出すことができたのは、ロビンソン・クルーソーと、――もしもこのますます矮小化し、官僚主義的に組織化されていく世界にもフライデーのような人がいるとして――その忠僕フライデーだけでした。

社会的統合は、社会がまとめられる方途として、社会的結合に取って代わりました。その相違についてはこのように言えるでしょう。つまり、諸々の社会を結び付けていた社会的結合のようなタイプはふち糊の類いに比せられるのに対して、社会的統合はばらばらの部分を一緒に釘付けにしてしまうことによってなされる、と。

結合は部分的に、しかもその最も高度な表現として、共通の宗教に依存していました。それに対して現代社会の統合とは、宗教的な情緒や集合的感情などというものにまったく依存しない非人格的で構造化された合理的システムなのです。こうして宗教は経済的、政治的、文化的な事柄のみならず、教育の事柄との間でさえ、かつてのような緊密な結び付きを喪失しています。これら社会的制度に関わるものはすべて、非人格的で合理的な再構成を被ってきているのです。個人的な問題、価値、目的、そして究極的な意味などを扱う宗教は、現代的な事柄に関する合理的かつ技術的な機構にほとんど近づこうとはしません。

社会的統合は「すばらしき新世界」、つまりフランス革命に引き続いて起こった世界やアメリカ合衆国という新たな社会の創造を思い描いています。宗教はもはや国教を遵奉することと同じものではないですし、ましてや強制されるべきものでもありません。それは市民社会の基礎であることをやめ、その代わりに自由な表現の領域となっています。

それはつまり、ある体系に自由に参加するということでして、そこでは礼拝を選択する自由が保証され、更にその自由が他のいろいろな選択肢にまで押し広げられつつあるのです。公には、そして社会体制にとっては、宗教上の好みというのはどうでもよい問題なのでして、そのことは「あなたの選んだ宗教」を申し立てるように求めるアメリカ式の決まり文句に端的に表されていますが、こうした言い回しはヨーロッパ人にとってはやはり何かしら奇妙に響くのです。いずれにせよ、そのような開かれた選択は、イギリス陸軍によって認められている制限付きの選択の自由とは好対照をなしています。イギリス陸軍では、明瞭かつ迅速に、自分自身がローマ・カトリック（R.C.）あるいは他の宗派（O. D.）の教徒であることを言明しない限り、国教徒（C. of. E.）であると（他の何であり得ましょうか？）決めつけられてしまったものなのです（私が徴兵されていたのはさほど昔のことではありませんから、恐らく今でもそうなのでしょう）。

このような対照性は偶然のものではありません。そこには次の二つのものの間の差異が反映されているのです。すなわち一つは、社会が宗教的斉一性を維持するこ

ともできなければ、社会的結合が存続すると仮定することもできないので、寛容が公然と支持されてきた文脈です。そしてもう一つは、今日の世界の状況では宗教的多元主義に対する寛容を公けに認め、社会も徐々にそれに従っていかざるを得ないことが明白になってきているにもかかわらず、宗教的規範性や統一性に関する歴史的仮定をいまだに引きずっている社会です。

宗教の私化（わたくし）と新たな機能

社会的結合や国家の正当性を維持するというかつてのような機能はもはや現代社会に適合しませんので、宗教は今やそうした旧来の関わり合いから自由になっています。まず第一に、宗教は極めて私的な現象になっているのです。宗教は紛れもない公的な存在であるということをやめており、もはや社会の関心と一体とはみなされません。

古い制度は――古い建造物によって象徴されるというのでもないのですが――、無論すぐさま消滅してしまう訳ではありませんが、その目的とするところは虚しいものとなってしまう傾向があります。それらは別に支えを要求するでもないのですが、何と言ってもほとんど影響力をもたないのです。宗教の私化（わたくし）（privatization）とは社会学者が夙に注目していた現象であって、救済の意味や手立てを求め了解する方途がさまざまにある中で自由に選択する、という考え方に一致しているのです。

宗教の私的な機能が個人にとって重要であるとしても、そうした私化が現代社会において可能な宗教の役割を狭めてしまったと考えることは、実態を正しく伝えてはいないでしょう。国家を正当化するという務めから解き放たれて、宗教は今や自由にまったく異なった機能を追求しています。それはあの二者択一的な伝統から生じてきたといってもよいもので、反対の声となっているのです。

つまり、宗教は抵抗の声となることができるのです。たとえそれが、次第に合理化され、官僚主義的な規則によって支配されており、個人や恵まれない階層の人々が現代的な消費運動の実利主義から必ずしも十分に守られることのない社会にあっては、恐らくほとんど実効のない声の一つに過ぎないとしてもです。

宗教団体は既に信奉者たちをそこへと突き動かしています。そしてそれらは、政治の限られた関心や、コンピュータ化され中枢で組織化された現代国家の無表情さを超えていく、大義を奉じることができるのです。誰しも気づいているように、政治家とはその場限りの良心の生きものです。彼らは二年、三年、四年先にある次の選挙に気を取られています。長期的な目的というものは彼らの想像力を超えているのです。しかしながら、人類は更に長い間存続し続けていくのですから、環境汚染、山林伐採、地球温暖化の可能性といった問題に、つまり長期的な代償を無視して目先の利益だけを約束する政治の不幸にして無計画な結果というものに、関心を払うのは当然のことでしょう。

魂からなる抗議の声が向けられるべき問題は、自然汚染ばかりではありません。その場限りの利益や刹那的な享楽に対する大衆の要求は、過度に刺激的なテレビやビデオの長期的な、それどころか何世代にもわたる効果といったものからわれわれの目をそむけさせることになるでしょう。実際、そうしたテレビやビデオはいたずらに一つの世代の興をそそることによって、有害な幻想を与え、次世代の基準を下落させているのでして、最近の悪魔のような幼児虐待をその実例として直ちに挙げることができます。

良心の声こそ、宗教がその精神的伝統の一部として啓発すべきものなのです。その声は、戦争に対し、暴力に対し、不当な監禁や拷問に対し、為政者たちの腐敗に対して発せられるでしょう。またその声は、タイ、ボリビア、コロンビアの山間農民がアヘンやマリファナ以外の作物を作っても儲からないようにしている経済的状況に対しても、人の弱みや有害な中毒につけ入ることによって儲けようとしている多国籍企業に対しても挙げられるでしょう。そしてこれこそが二者択一的な声としての宗教なのです。それは、たとえ歴史の上で宗教的対立があったにしても、自らの伝統に対して尊敬を払わせるばかりではなく、宗教的な良心の大義が表明されるときには自ずと備わってくるはずの謙虚さ、品位、威厳というようなものに対しても、尊敬を払わせるような声なのです。

これらさまざまの真摯な関心は、人間の安寧や未来にとって極めて重要なものですが、宗教の潜在的な機能はそれに尽きてしまうものではありません。それらは単に、宗教の現代的な役割の可能性の一例であるに過ぎないのです。

しかしながら、宗教団体が圧力団体でないということを、われわれは記憶しておく必要があるでしょう。宗教団体は院外団ではないのです。宗教団体は、己が利益のために特定の目標を追い求める当事者の組合ではありません。定義するならば、宗教団体とはいかなるものであれ、この世を超えた目的を抱いているものなのです。宗教というものは、物質的な関心よりも何かしら高いものに基づいて人々を引き付けます。つまり宗教というものは、あからさまな社会的、物質的、心理学的関心を超えているのです。

そうした宗教団体は、一つの結果だけを求める組織ではあり得ません。それはむしろ、救済という「包括的政策」とも呼ばれ得るような大きなプログラムを奉じなければならないのです。しかも、宗教が構成員個々の目標をすべてより広い見地の内に取り込むことができるのは、まさにそうした大きな関心のゆえなのです。現代宗教において私化は顕著なことですし、個人が私的で自由な選択をなし、まったく勝手な霊的教説や祈りの実践を展開させることさえあるにしても、宗教者の大部分は心を同じくする人々と結ばれているというのが、なお実情なのです。

今日いかなる宗教も、国家という政治的実体や大衆という社会的実体に精神的に対応していると、主張することはできません。一つの国の中にはさまざまな信仰がはたらいていますが、たとえそれらがすべて一緒になったとしても、政治権力や世俗社会と精神的に釣り合うものとして対応している訳ではないのです。とは言え宗教団体はまだそれぞれ別個に、社会全体の中で自ら選んだ分野に関してだけではありますが、何らかの社会的要求を満たしています。小さいながらも、各々のセクトは信者にとって連帯的な機能を果たしているのです。それらは共同体に新たな基盤を与えています。セクトは個々人に支えを与えるのですが、そうした支えは、構成員が互いに知り合い、同じものの考え方や同じ希望の享受に与っていることに基づく信頼の絆ができていくにつれ、相互的なものとなっていきます。そのとき宗教は、ますます非人格的になっていく世界の中で人々を結び付ける力となるのです。

今日、宗教的な後ろ楯を得て形をなしつつある連帯はもちろん、過去の宗教的な集まりのように地方性によって定められているというものではありません。そこには共通の民族性や自然の共同体を強化する側面は欠如していますが、自ら選択してきた構成員から成るすぐれて自発的な組織だという事実によって際立っています。それらの連帯はこのように、共通の地方性を欠いていることで喪失したものを、自発的な共感や自由意志による参加をより多く体験することによって取り戻しているのです。現代世界でなおも社会的な支えや連帯の最も持続的かつ深遠な基盤たり得るようなものを創り出すとすれば、次第に合理化され、ばらばらになっていくわれわれの都市的環境にあっては、まさにこのようなことにほかならないでしょう。

直接的に向かい合い、個人が互いによく知り合っているという共同体のレベルを超えて、幾つかの現代の教団は、既存の社会と完全に重なり合うということはないにしても、国全体にわたる広範な存在となっており、ある程度公けにも認められております。そうしたデノミネーションは個人と国家との間に立つ、媒介的な関係システムとして機能するでしょう。それらは信義の中心を提供しますが、そうした中心は政治的構造からは独立しており、ある目的観や明確に選ばれた主義主張に帰属しているという感情を涵養するものです。こうした運動は、人間的な側面をもつのに十分なくらい小さく基礎的なものでありながら、重大な目的を信奉するに足る大きさももっております。

われわれはまた、今日の世界において宗教には境界というものがないという事実を見失ってもなりますまい。自発的に共有されているのだということをより直接的にかつ深く感じさせるような仕方で、文化、言語、人種の異なる人々をつなぐことにより、特定の教会や社会運動を支えるものも世界中に広がっていくことができましょ

う。そうした結び付きは私利私欲や物質的取り引きによる利潤の追求などでもたらされるものではなく、自発的な誠意という精神によって生み出され、参加しているという感覚を分かち合っているのです。今日の宗教運動に国際性があるのは、聖職エリートの後ろ楯を得た植民地スタイルの布教の結果ではありません。それは、自らに救済の希望を与えてくれた信仰に熱中している在俗信者による流布の成果なのでして、そうした信仰を今度は彼らが自覚的に他の人々に伝えようとしているのです。私欲に囚われない誠意や、ごく普通の信者たちの間にある相互信頼の開放性たるや、そこに含まれている信者の実数とまったく不釣り合いなくらいに国際的なスケールをもち、世界的なものとなっています。

慈善事業もまた常に宗教の一つの機能でありました。こうした慈善が申し出られる期間は必ずしも無条件なものではありませんでした。しかし、宗教的な機関が現実の社会秩序を正当化するというかつてのような役割から超然とすることにより、この昔ながらの社会参加を広げる機会はかえって増えたのです。現代社会は技術的な進歩が顕著であるにもかかわらず、そしてある点ではまさにそのゆえに、さまざまな緊張、歪み、心の不安を生み出しています。非人格的な社会関係、競争的な消費活動がもたらした貪欲さ、何でも「最新の」ものを売ろう、あるいは買おうという強迫観念による新たな型の疲労など、こうした傾向のすべてが犠牲者を生み出しているのです。社会は落ちぶれ、能力もなく、堕落した人々、――よるべなき人々や浮浪者――にこれまでうまく対処してきていません。現代の為政者たちは実のところ、こうした問題はもはや自分たちの手には負えないと認めているようにさえ思われます。民衆レベルで人々の不幸に効果的に対処していくには、政府の機関はあまりにぎこちないですし、官僚は合理的に過ぎますし、政府の標榜する人間愛もあまりに紋切型で非人格的です。宗教団体はそうした趣旨を自ら実行しようとすればいつでも、この方面で持続的な機能を発揮します。

宗教的な運動は何らかのより高い霊的自覚や意識の高揚した状態の実現に向けて努力すべく信者を督励し、超越的な目的を追求するよう促します。過去、そうした努力は時として純粋に神秘的な体験に求められたものですが、そうした神秘主義はわれわれの時代にはほとんど適合しないでしょう。恐らくは現代の行動主義のゆえに、また自分の潜在的な能力を実際に実現していくのに適当な機会が増えていることのゆえに、当今では精神的努力というようなものも、禁欲や自己犠牲よりもむしろ自己表現の欲求を満たすためのものであるように思われます。

現代世界では、精神的努力が中世の神秘家のように内面的な幻想にのみ限定されねばならないほど、われわれの見通しが限られているという訳でもありません。今日では真摯な宗教的探究は、創造的活動、芸術的表現、より広い社会的関心に基づく自己表現の機会など、実にさまざまな形で外向的な努力にも結び付けられ得るのです。こうしたことはすべて、部分的には宗教の私化に由来するのですが、宗教的共同体の刺激をもまた必要としているのでして、この場合宗教的共同体とは、そこにおいて学び、創造的な機会を開発すべき文脈にほかなりません。

結び

世俗化が起こる前には、宗教の機能はまさに社会の構成の中心に位置していました。今日もはやそうではありません――しかし宗教は、いまだ死に絶えてはいないのでして、それは社会体制に対する宗教の意義が減少していないからにほかなりません。

宗教は存続しています。そして宗教が存続することは、人々が共同体や兄弟愛や同胞意識の体験を求め、決まりきった日常生活やまったく個人的、派閥的な関心に基づく利己的追求を超えた大義による連帯を求め続ける限り、確かなものであるのです。社会全般から見ると、宗教的機能は周縁にあるに過ぎませんが、そうした周縁は実は重要なものなのです。

社会の支配的な体制が進歩した技術上の便宜を今は享受してはいても、やはりなお不安定なことは明らかです。統合された活動システムである現代社会において、もはやかつてのような社会的結合は実現さるべくもありません。……しかしながら社会というものは、なお、いろい

ろな形の社会秩序を確保していこうとする市民の善意の積み重ねに依存しているのです。もはや国家は宗教に対して独占も、人々に課せられた責務の成果を享受するということも保護してはくれませんし、宗教自体が実に多様かつ多面的になっています。しかしながら、宗教は公平無私な善意や市民の関心の蓄積を督励し得る数少ない力の一つであり続けています。そして、機械的に統合されたわれわれの社会といえども、それが存続していくためにはこうした宗教が不可欠なのです。

〔本稿は一九九一年三月二十三日、タプロー・コートにある東洋哲学研究所ヨーロッパ・センター（IOP・EC）で開催された連続講座「東洋の英知と現代社会」の第一回講演を収録したものである〕

（オックスフォード大学教授）
（きむら かつひこ・筑波大学助手）